



第303図 SK17～SK23位置図

**SK20(図版19 附表45)**

**検出状況** 南地区北西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK18の南側、SK20の北側に位置する(第303図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸長方形をなし、主軸方向における規模は1.21m、その直交方向で58cmを測る。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 杯と椀の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。椀は内外面に赤彩が認められる。

**須恵器** 梗が1個体(547)出土している。内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

**時期** 出土遺物から南構VII-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

**SK21(図版19 附表45)**

**検出状況** 南地区北西部に位置する(第289図)。SK19の北東側に位置する(第303図)。平面形は隅丸長方形傾向にあり、主軸方向で1.10m残存し、その直交方向で80cmを測る。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 杯と甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯は口縁部片と底部片が出土している。底部片は回転糸切りにより切り離され、内外面に赤彩が認められる。甕は口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は甕Ecと類似する形態である。体部片は丸胴タイプで、内外面ともナデにより仕上げられている。外面には煤、内面には焦げの付着が認められる。

**須恵器** 杯A(548)と杯B(549)が出土している。548は杯Afに分類され、底部がヘラにより切り離され、ナデが加えられている。全体的に器壁が厚く仕上げられている。549は椀Ba6に分類される。底部はヘラ切り後ナデを加え、その後高台が貼り付けられている。

**時期** 出土遺物から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

**SK22(図版19 附表45)**

**検出状況** 南地区北西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK23の南西側に位置する(第303図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸長方形傾向にあり、その規模は主軸方向で1.00m、その直交方向で61cmを測る。

**出土遺物** 須恵器の壺が1個体(550)出土している。550は壺Nの底部と考えられ、底部から体部にかけて残存する。体部は、外面が平行叩き、内面が横ナデの後、内外面が回転ナデにより仕上げられている。体部外面下端は強い回転ヘラ削りにより仕上げられている。底部は未調整である。

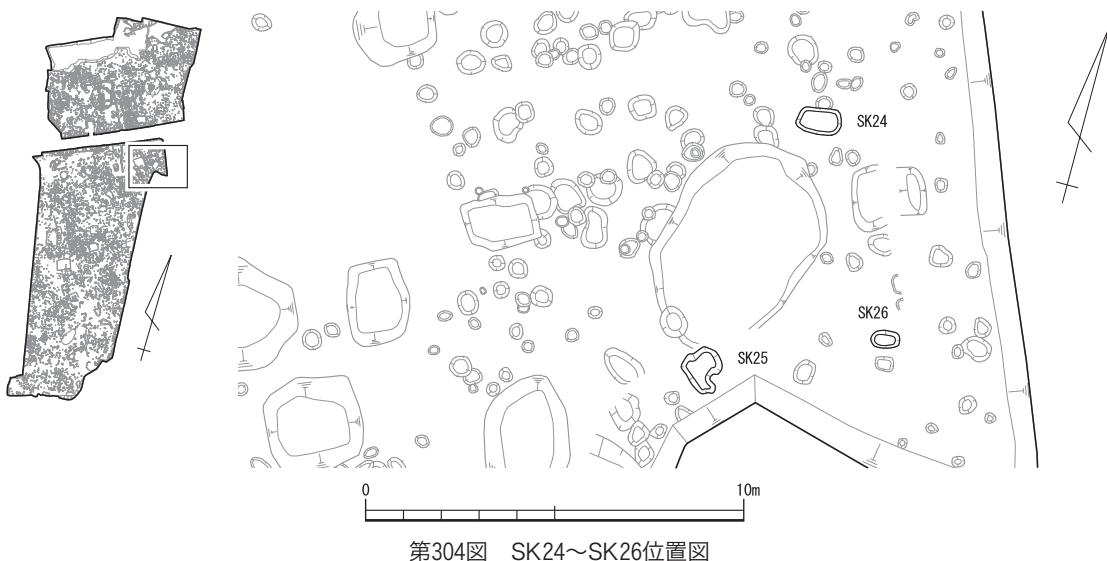
**時期** 出土遺物から南構VII期に位置付けられる(第6章第2節)。

**SK23(図版19 写真図版84 附表45)**

**検出状況** 南地区北西部に位置する(第289図)。第2次調査で検出した遺構である。SK22の北東側に位置する(第303図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は方形傾向にあり、その規模は主軸方向で80cm、その直交方向で75cmを測る。

**出土遺物** 須恵器の杯Bが1個体(551)出土している。底部は回転ヘラ切り後高台が貼り付けられている。

**時期** 出土遺物から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第304図 SK24～SK26位置図

**SK24(図版19 附表45)**

**検出状況** 南地区北東部に位置する(第289図)。第3次調査で検出された遺構である。SK26の北西側に位置する(第304図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸長方形をなし、その規模は主軸方向で1.20m、その直交方向で70cmを測る。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 壺の口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。口縁部片は壺Gdに分類されるものである。体部片は、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。

**須恵器** 梵が1個体(552)出土している。杯の可能性も考えられる。

**時期** 出土遺物から南構VII-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

**SK25(図版19 附表45)**

**検出状況** 南地区北東部に位置する(第289図)。第9次調査で検出された遺構である。SK26の南西側に位置する(第304図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は方形傾向にあるが、不定形である。その規模は主軸方向で1.00m、その直交方向で1.15mを測る。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 高坏・杯・壺が出土している。高坏は553の脚裙部が出土している。外面はヘラミガキ、内面は横方向のハケ、端部は横ナデにより仕上げられている。杯と壺については小片のため図化できなかった。杯は体部片が出土しており、内外面に赤彩が認められる。壺は、壺Ecに分類される口縁部片が出土している。

**須恵器** 杯・壺・壺が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯は体部から底部にかけて残存する小片である。壺と壺は体部の小片が出土しており、壺の外面は叩き整形後カキ目により仕上げられ、内面には当て具痕が認められる。

**時期** 出土遺物から南構VII-VIII期に位置付けられる(第6章第2節)。

SK26(図版19 附表45)

検出状況 南地区北東部に位置する(第289図)。第9次調査で検出された遺構である。SK24の南東側、SK25の北東側に位置する(第304図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は橢円形をなし、その規模は主軸方向で77cm、その直交方向で48cmを測る。

出土遺物 土師器の杯と甕が出土しているが、杯については小片のため図化できなかった。口縁部片が出土している。甕は、甕Ebに分類される口縁部片(554)が出土している。口縁部はく字形に屈曲し、端部を抑えるような横ナデにより外方に肥厚している。外面は、体部から口縁部にかけて縦方向のハケの後横ナデ、内面は体部が横方向のヘラ削り、口縁部が横方向のハケにより仕上げられている。

時期 出土遺物から南構Ⅳ期に位置付けられる(第6章第2節)。



第305図 SK27・SK28・SK33・SK34位置図

**SK27**

**検出状況** 南地区中央部に位置する(第289図)。第2次調査で検出された遺構である。SK28の北側にあたる(第305図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸方形傾向にあり、その規模は主軸方向で1.00m、その直交方向で90cmを測る。

**出土遺物** 土師器の甕・杯・高坏が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。

甕は甕Eaと甕Gaに分類される口縁部の小片が出土している。前者は小型で薄手の土器である。杯は、体部の小片で、内外面に赤彩が認められる。薄手の製品である。高坏は坏部の小片が出土している。

**時期** 出土遺物から南構VII-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

**SK28(図版19・75 附表45・103)**

**検出状況** 南地区中央部に位置する(第289図)。第2次調査で検出された遺構である。SK27の南側、SK33・SK34の北側に位置する(第305図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は橢円形をなし、その規模は主軸方向で1.13m、その直交方向で89cmを測る。

**出土遺物** 土器と石製品が出土している。

**土 器** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 杯と皿が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯は体部片が、皿は底部片が出土している。皿は精良な胎土である。

**須恵器** 杯蓋(555)・杯A・杯・甕が出土している。杯蓋は、口縁端部に内傾する端面がわずかに認められる。他の器種については小片のため図化できなかった。杯Aは底部片が、杯は口縁部片が出土している。甕は体部片が出土しており、外面はナデにより仕上げられ、内面には当て具痕が認められる。

**石製品** 磨石が1点(S10)出土している。厚みのある扁平な自然石を利用したもので、完存する。扁平な2面に使用痕が認められる。

**時期** 出土遺物のなかで、杯蓋については他の土器と比較して明らかに古く位置付けられるものである。このため、南構VII-VIII期に位置付けられる(第6章第2節)。

**SK29(図版19 写真図版149 附表45)**

**検出状況** 南地区中央部西側に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK30の北西側に位置する(第306図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸三角形をなし、その規模は主軸方向で1.10m、その直交方向で55cmを測る。

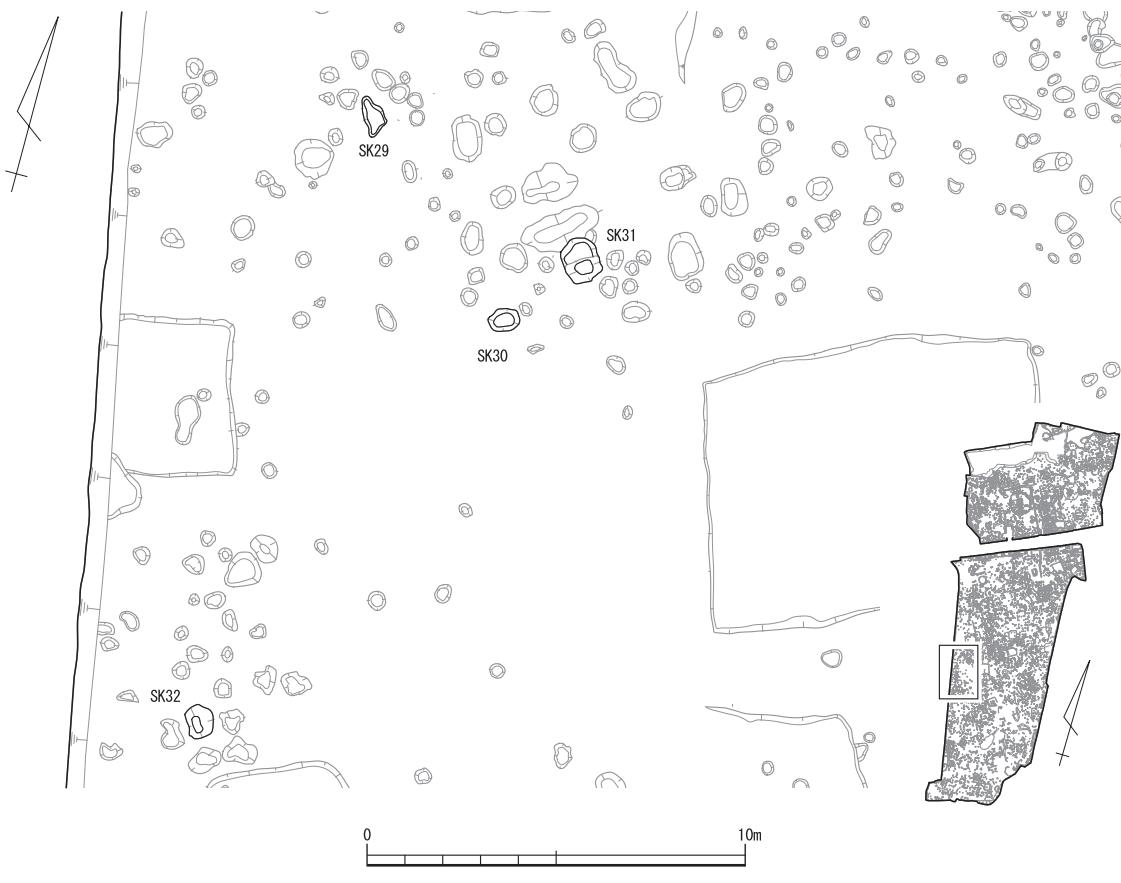
**出土遺物** 土師器・緑釉陶器・黒色土器が出土している。

**土師器** 甕の口縁部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

**緑釉陶器** 底部から口縁部にかけて残存する557の1個体である。椀d5に分類され、緩やかに内湾傾向をなす体部に対して、口縁部が外方に短く屈曲している。内外面とも回転ナデにより仕上げられ、内外面に釉が掛けられている。底部の残存がわずかであるためその形態は明確ではないが、平高台の可能性が高い。焼成は軟陶である。

**黒色土器** 556の杯1個体が出土している。体部から口縁部にかけて残存し、外面は回転ナデにより、内面は横方向を主体としたヘラミガキにより仕上げられている。内面のみ黒化している(杯A)。

**時期** 出土遺物の特徴から南構VII-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第306図 SK29～SK32位置図

#### SK30(図版19 写真図版84 附表45)

**検出状況** 南地区中央部西側に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK29の南東側、SK31の南西側に位置する(第306図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は橢円形をなし、その規模は主軸方向で81cm、その直交方向で60cmを測る。

**出土遺物** 土師器の甕1個体(558)が出土している。甕Fbに分類される。やや長胴気味の体部に対して口縁部がく字形に屈曲し、端部が上方に摘み上げられている。体部外面はハケ、内面は斜方向のヘラ削りにより仕上げられている。口縁部は、内面が横方向のハケ、外側が横ナデにより仕上げられている。

**時期** 出土遺物の特徴から南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK31(図版20 写真図版45・84 附表45)

**検出状況** 南地区中央部西側に位置する(第289図)。第1次調査で検出した遺構である。SK30の北東側に位置する(第306図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸方形傾向にあり、主軸方向で1.20m、その直交方向で95cmを測る。横断面は皿状に近く、最深部における検出面からの深さは25cmである。

本遺構を検出した面の中央部から、土師器の鍋(559)が押しつぶされた状態で出土している(第307図)。さらにこの鍋を取り上げ後、その下層から土師器の杯(560)が出土している。

**出土遺物** 土師器の鍋(559)と杯(560)が出土している。鍋は鍋Bに分類され、半球形の体部に口縁部がく字形に屈曲している。体部外面を縦方向のハケ、体部内面を横方向のハケの後ヘラナデを加え、

最後に口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。

杯は杯Ad7に分類される。底部がわずかに残存し、ヘラ切りにより切り離されている。体部から口縁部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物の特徴から、南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK32(図版20 写真図版84 附表45)

検出状況 南地区中央部西側に位置する(第289図)。

第1次調査で検出された遺構である。SK35の北西側(第289図)、SK30の南西側(第306図)に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸長方形をなし、主軸方向で90cm、その直交方向で70cmを測る。

出土遺物 須恵器の壺(561)が出土している。底部はヘラ切り後ナデ、体部内外面は回転ナデにより仕上げられている。底部から体部にかけての器壁が厚く仕上げられている。小瓶の底部の可能性も考えられる。

時 期 出土遺物の特徴から、南構VII期～VIII期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK33

検出状況 南地区中央部に位置する(第289図)。第2次調査で検出された遺構である。SK34の南西側に位置する(第305図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は橢円形をなし、主軸方向で1.20m、その直交方向で80cmを測る。

出土遺物 土師器の杯が出土しているが、小片のため図化できなかった。内外面に赤彩が認められる。

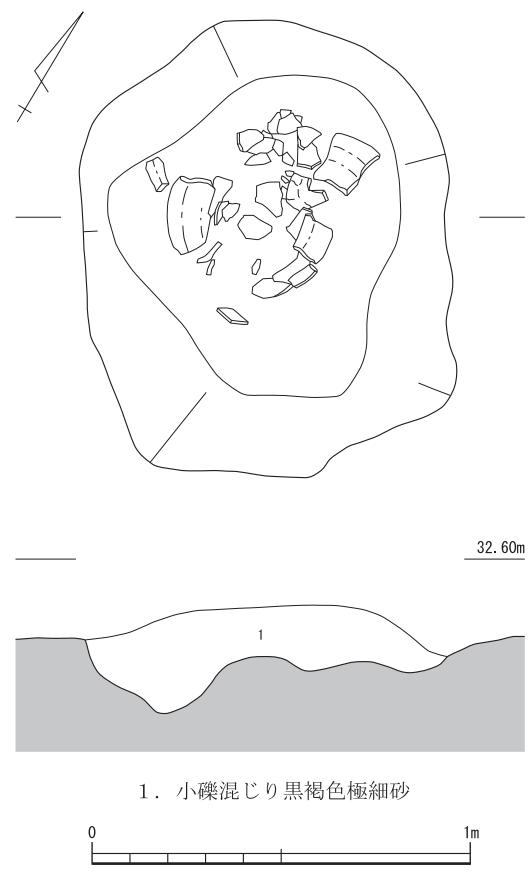
時 期 出土遺物の特徴から、南構VIII期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK34(図版20 附表45)

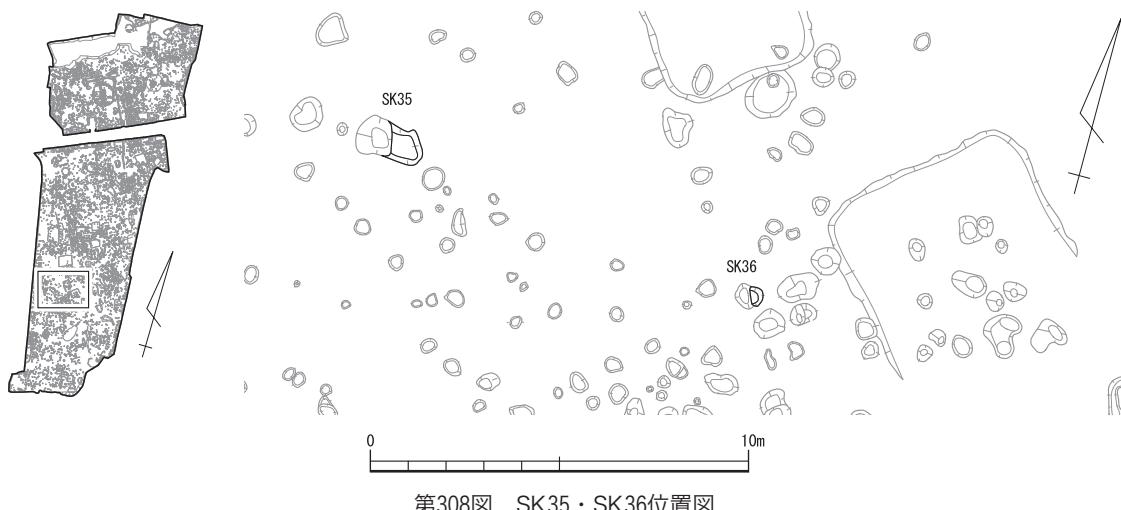
検出状況 南地区中央部に位置する(第289図)。第2次調査で検出された遺構である。SK33の北東側に位置する(第305図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長橢円形をなし、主軸方向で1.10m、その直交方向で50cmを測る。横断面は皿状をなし、最深部における検出面からの深さは10cmである。遺構内には黒褐色極細砂～細砂1層が堆積していた。

出土遺物 土師器の碗(562)が出土している。碗Cbに分類されるもので、底部は平底をなし、回転糸切りにより切り離されている。他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土遺物の特徴から、南構IX-3期に位置付けられる(第6章第2節)。



第307図 SK31



第308図 SK35・SK36位置図

#### SK35(図版20 附表45)

**検出状況** 南地区中央部西側に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK36の北西側に位置する(第308図)。柱穴と切り合い関係にあり、これに切られている。このため約1/3を欠く。平面形は隅丸長方形をなすものと考えられ、主軸方向で1.10m残存し、その直交方向で85cmを測る。

**出土遺物** 須恵器の杯蓋(563)が出土している。口縁部を中心に残存し、口縁部は短く下方に屈曲傾向にある。

**時期** 出土遺物の特徴から、南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK36

**検出状況** 南地区中央部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK35の南東側に位置する(第308図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形はやや歪んだ隅丸方形をなし、主軸方向で73cmを測る。

**出土遺物** 土師器の甕が出土しているが、小片のため図化できなかった。体部片が出土しており、外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

**時期** 出土遺物の特徴から、南構IV-VI期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK37(図版20 附表45)

**検出状況** 南地区中央部東側に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK38の北西側に位置する(第309図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形はやや歪んだ隅丸方形をなし、主軸方向で1.35m、その直交方向で1.15mを測る。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 甕が出土している。図化できたのは564の1個体である。甕Gaに分類され、体部から口縁部にかけて残存する小型の甕である。外面は体部が指オサエの後口縁部にかけて横ナデ、内面は体部が横方向のヘラ削りの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。

**須恵器** 杯の体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。焼成がやや不良である。

**時期** 出土した須恵器の特徴から、南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第309図 SK37・SK38・SK43位置図

**SK38(図版20 写真図版84 附表45)**

**検出状況** 南地区南東部東端に位置する(第289図)。第9次調査で検出された遺構で、SK37の南東側、SK43の北東側に位置する(第309図)。調査区より東側へ拡がっており、検出できたのは全体の約1/2に限られる。平面形はやや歪んだ隅丸方形をなし、主軸方向で1.20m、その直交方向で65cm残存する。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 瓢と高杯が出土しているが、図化できたのは瓢の565に限られる。565は瓢Edに分類され、球形の体部に口縁部が大きく外反する比較的大型の瓢である。外面は、体部が斜方向の後不定方向のハケ、口縁部が縦方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向もし

くは斜方向のヘラ削り、口縁部が横方向のハケにより仕上げられている。

この他、甕Galに分類される口縁部片が出土している。また、高杯は脚端部片が出土している。

**須恵器** 杯もしくは杯蓋・高杯・甕が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。杯もしくは杯蓋は、口縁部のみの残存のため、器種の特定が困難である。高杯は杯部と脚部の接合部が出土している。甕は体部の小片が出土しており、内外面がナデにより仕上げられている。

**時期** 出土した須恵器の特徴から、南構VI - 2期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK39(図版20 附表45)

**検出状況** 南地区南西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK40の西側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなし、主軸方向で1.02m、その直交方向で82cmを測る。

**出土遺物** 須恵器の杯A(566)が出土している。杯Amに分類され、底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。体部と底部の境外面には回転ヘラナデが加えられている。

**時期** 出土した須恵器の特徴から、南構VII - 2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第310図 SK39～SK42・SK44～SK47位置図

**SK40(図版20 附表45)**

**検出状況** 南地区南西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK39の東側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は橢円形をなし、主軸方向で1.10m、その直交方向で78cmを測る。

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 鍋と甕が出土している。鍋は568の1個体で、鍋Aaに分類される。口縁部を中心に残存する。外面は体部から口縁部にかけてハケ、内面は体部が横方向のヘラ削り後ナデ、口縁部が横方向のハケにより仕上げられている。最後に、口縁端部を中心に内外面が横ナデにより仕上げられている。甕については体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

**須恵器** 杯B蓋(567)と甕が出土している。567は口縁部を中心に残存する。内面に朱墨の付着が認められ、硯として転用されたものと考えられる。蛍光X線分析の結果、ベンガラとの分析結果が得られている(第5章第8節)。甕は体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面は叩き整形、内面はナデにより仕上げられている。

**時期** 出土した須恵器の特徴から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

**SK41(図版82 写真図版194 附表100)**

**検出状況** 南地区南西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK46の西側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸長方形をなし、主軸方向で1.25m、その直交方向で80cmを測る。

**出土遺物** 磨石(S43)が出土している。紡錘形をなす自然石を利用したもので、その先端部に摩滅痕が認められる。一部に赤色顔料と考えられる付着が認められる。

**時期** 時期の特定は困難である。

**SK42(図版20~22 写真図版84~86****附表45・46)**

**検出状況** 南地区南半部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。

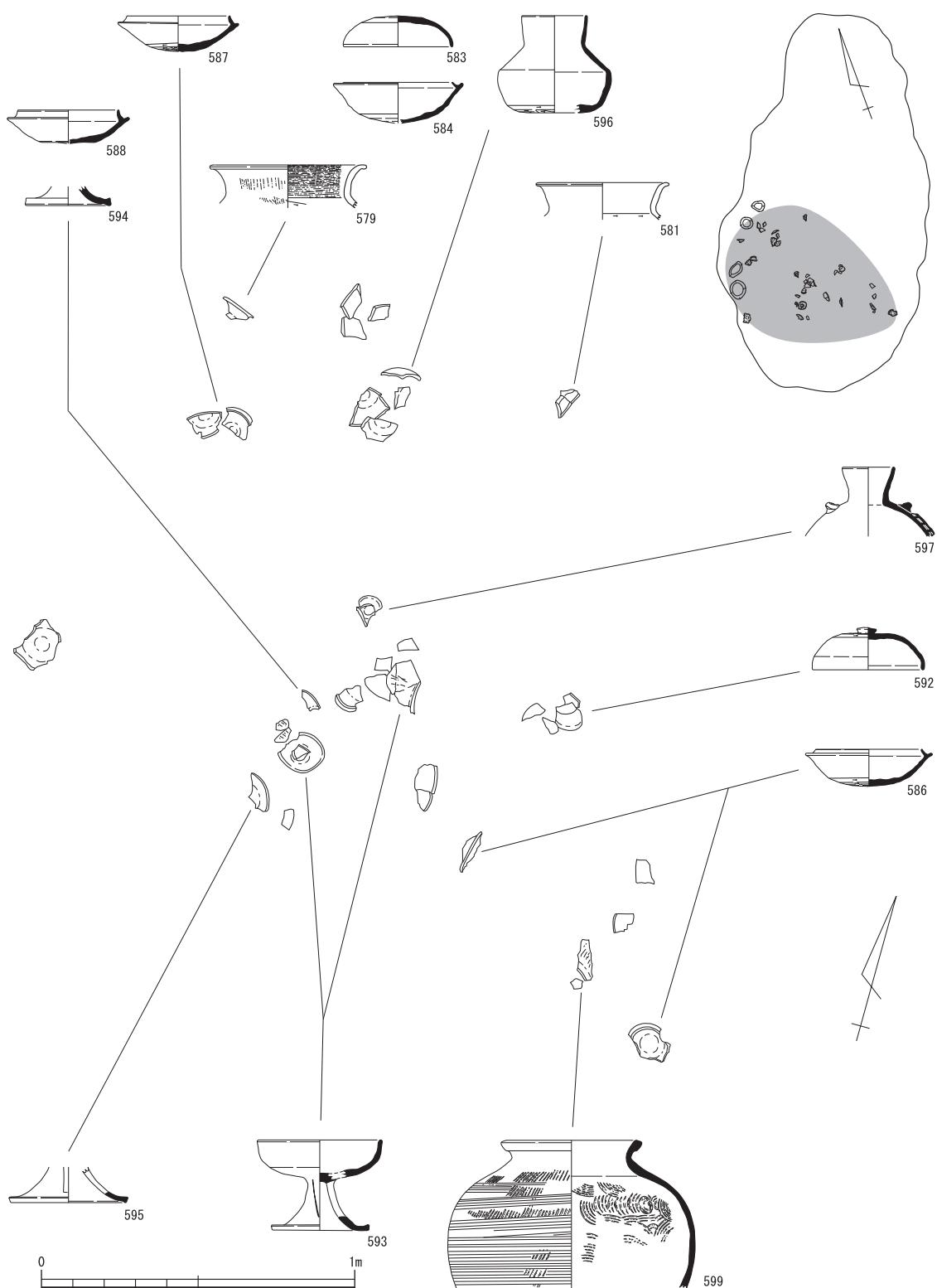
SK40の南東側・SK46の北側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。当初は竪穴住居跡の可能性が高いものとして調査を進めていったが(第311図)、平面形および肩部の特徴から本書では土壌として報告する。



第311図 SK42

平面形は橢円形傾向にあり、主軸方向で11.70m、その直交方向で6.50mを測る。横断面は皿状に近く、最深部における検出面からの深さは40cmである。埋土は黒色極細砂～細砂1層が堆積していた。

本遺構を検出した面から、比較的多くの土器が出土している(第312図)。須恵器を中心に形態をとどめた状態で出土していることから、意識的に廃棄されたものと考えられる。



第312図 SK42 土器出土位置

**出土遺物** 土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 壺・小型壺・杯が出土している。小型壺については体部の小片で、図化できなかった。

杯は569の1個体である。杯Cdに分類されるもので、内外面とも横ナデにより仕上げられ、その後内面には放射状の暗文が施されている。また体部下端には横方向のハケ目が認められる。

壺は570～581の12個体図化している。壺Edと壺Daが出土している。

甕Edは570～577・580の9個体で、口縁部が「く」字形をなしている。いずれも体部内面を横方向のヘラ削り、外面を縦方向のハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。574と575の口縁部内面は横ナデの前に横方向のハケが行われている。後者のタイプは、基本的な調整は前者と同じである。このなかで578と579の口縁部内面は、横方向のハケが顕著に認められる。580の外面のハケについては、体部から口縁部にかけて連続するものではなく、体部が横方向、口縁部が縦方向とその向きが異なっている。

甕Daは578・579・581の3個体で、頸部が直立するタイプである。578の頸部内面にはヘラ先の当たりが認められる。578の外面のハケについては、体部から口縁部にかけて連続するものではなく、体部が横方向、口縁部が縦方向とその向きが異なっている。

須恵器 杯蓋・杯・高杯蓋・高杯・壺・甕が出土している。

杯蓋は582と583の2個体を図化した。天井部が残存する583は杯蓋rに分類され、強い回転ヘラ削りの後ナデにより仕上げられている。

杯は584～591の8個体を図化した。杯e3・杯e4・杯c7・杯f・杯g2・杯i3・杯j5が出土している。

杯e3は584の1個体である。杯e4は589の1個体である。ともに底部は回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。589については底部のヘラ削りが粗く、全体的に器壁が厚く仕上げられている。内面には當て具痕が認められる。

杯c7は586の1個体である。底部は回転ヘラ削りにより仕上げられている。

杯fは591の1個体である。底部は回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。底部のヘラ削りは、一部静止ヘラ削りにより仕上げられている。仕上げは丁寧とは言い難い状況である。591の底部外面にはヘラ記号が認められる。

杯g2は587と590の2個体である。両個体とも体部との境に回転ヘラ削りが施されている。退化削りと考えられる。590の底部外面にはヘラ記号が認められる。

杯i3は585の1個体である。底部は回転ヘラ切り後ナデにより仕上げられている。

杯j5は588の1個体である。底部はヘラ切り後未調整である。

高杯蓋は592の1個体である。完存する個体で、杯蓋を基本形としている。天井部には擬宝珠形に近いつまみが貼り付けられている。天井部の1/3が回転ヘラ削りにより仕上げられている。

高杯は593～595の3点であるが、594と595は脚部のみの残存である。594は脚部Dbに、595は脚部Bに分類される。

593は無蓋高杯Hdに分類される。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられているが、杯底部外面は回転ヘラ削りにより仕上げられている。脚部上側には、ヘラ先による切込みが2か所相対する位置に認められる(写真図版86)。切込みは長さ4.90cm・5.00cmを測り、貫通する。また幅1mm～1.5mmと、鋭利な工具によるものである。この他595の脚部には方形の透かしが1か所残存する。

壺は596と597の2個体が出土している。596は直口壺で、底部から口縁部にかけて残存する。内外面とも回転ナデを基調として仕上げられているが、底部は回転ヘラ削り後ナデにより仕上げられている。

597は提瓶の上半部である。回転ナデを基調としているが、体部内面はナデにより仕上げられている。肩部には耳が貼り付けられている。粘土塊を貼り付けたものである。外面には縦方向のカキ目がわずかに認められる。

甕は598と599の2個体が出土している。598は口縁部を欠き、肩部と下半部を図上復元したものであ

る。外面は叩き整形後カキ目が施され、内面には当て具痕が顕著に認められる。599は甕Fcに分類され、体部中位以上が残存する。口縁端部は肥厚し、断面方形をなす。調整は598と同じで、口縁部は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。

時 期 出土した土器から、南構VI-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK43(図版22 附表46)

検出状況 南地区南東部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK38の南西側に位置する(第309図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は長楕円形をなし、主軸方向で1.03m、その直交方向で65cmを測る。

出土遺物 土師器の甕(600)が出土している。甕Ibに分類され、長胴タイプの甕と考えられる。頸部から口縁部にかけて残存する。外面は、頸部がナデ、口縁部が横方向のハケの後横ナデにより仕上げられている。内面は、頸部から口縁部にかけて横方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。

時 期 出土した土師器の甕から、南構VII-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK44(図版22 附表46)

検出状況 南地区南西部に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK45の南西側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸方形をなし、主軸方向で95cm、その直交方向で85cmを測る。

出土遺物 土師器の甕(601)が出土している。甕Fbに分類され、口縁部が残存する。口縁部内面を横方向のハケの後、口縁部内外面が横ナデにより仕上げられている。端部はわずかに沈線状をなしている。

時 期 出土した土器から、南構VI-1期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK45(図版22 附表47)

検出状況 南地区南部中央に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK41の南東側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなし、主軸方向で90cm、その直交方向で70cmを測る。

出土遺物 土師器の椀Bと甕が出土している。杯Aは602の1点が出土している。椀Bb2に分類される。底部は回転糸切りにより切り離され、他は回転ナデにより仕上げられている。

甕は体部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。外面はハケ、内面はヘラ削りにより仕上げられている。

時 期 出土した土器から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK46(図版22 附表46)

検出状況 南地区南部中央に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK45の北東側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は楕円形をなし、主軸方向で82cm、その直交方向で65cmを測る。

出土遺物 土師器の杯・杯A・甕が出土している。図化できたのは杯の603に限られる。体部から口縁部にかけて残存し、内外面とも回転ナデにより仕上げられている。杯Aと甕については小片のため図化

できなかった。杯Aは底部が残存し、回転糸切りにより切り離されている。甕は体部片が出土しており、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。

時 期 出土した土器から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。

#### SK47(図版22 附表46)

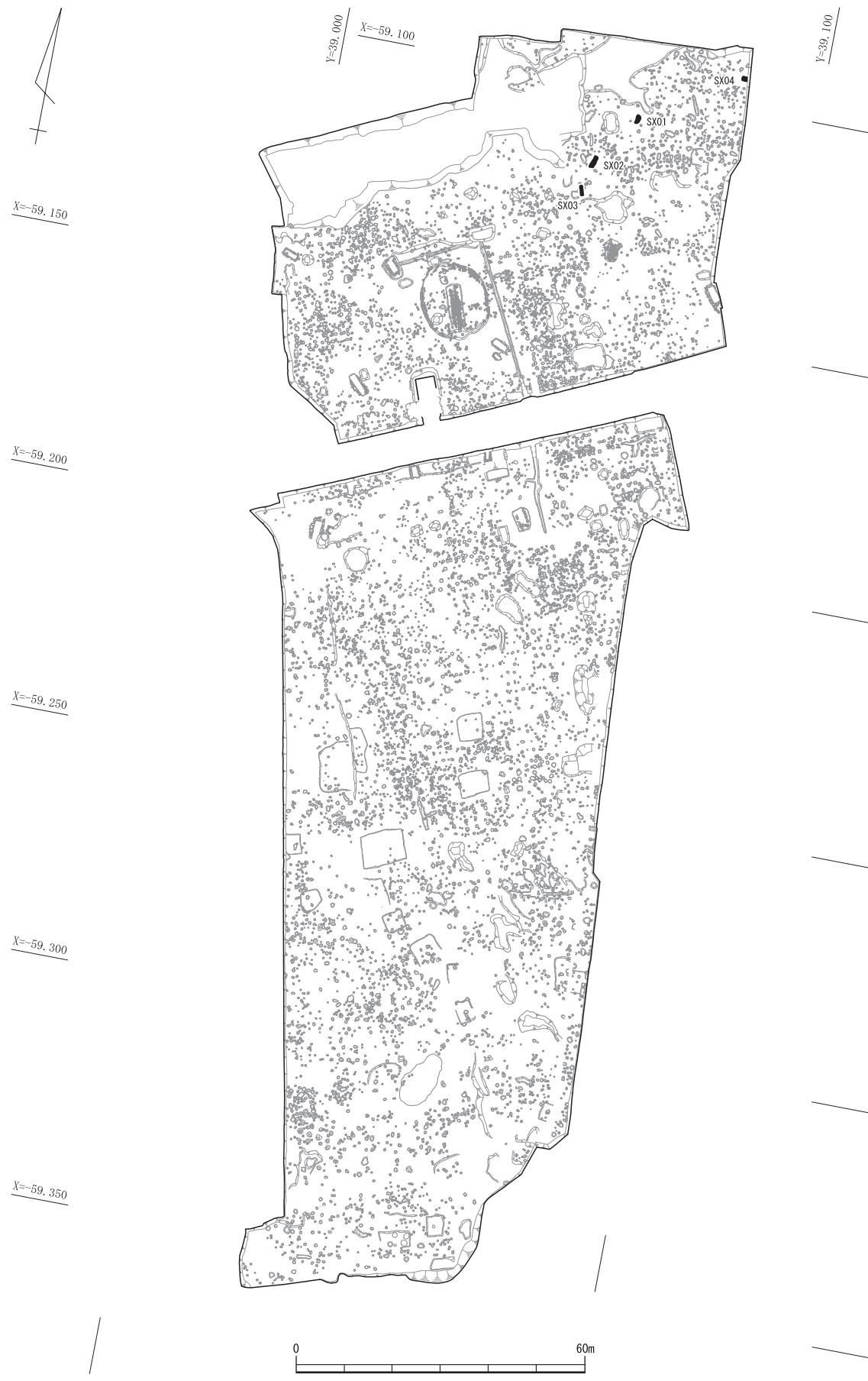
検出状況 南地区南部中央に位置する(第289図)。第1次調査で検出された遺構である。SK45の南東側に位置する(第310図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、完存する。平面形は隅丸三角形をなし、主軸方向で1.75m、その直交方向で86cmを測る。

出土遺物 土師器と須恵器が出土している。

土師器 壺と杯Aが出土している。壺(604)は壺Cdに分類され、広口壺に近い形態をなし、体部から口縁部にかけて残存する。体部内面は縦方向の指ナデにより仕上げられている。外面は頸部が横ナデにより仕上げられているが、他は摩滅のため観察できない。杯Aは底部片が出土しているが、小片のため図化できなかった。

須恵器 杯Aの底部片が出土している。小片のため図化できなかったが、底部はヘラ切りにより切り離されている。

時 期 出土した土師器の壺と他の土器とは時期差が認められる。須恵器の杯Aの出土から、南構VII-VIII期に位置付けられる(第6章第2節)。



第313図 木棺墓位置図

## 第6節 木棺墓

### 1. はじめに

4基(SX01～SX04)検出している(第313図)。いずれも北地区北東部で検出されている。4基はその主軸方位を異にするが、時期はほぼ同じものと考えられる。

### 2. SX01(写真図版47)

**検出状況** 北地区北東部に位置する。第4次調査で検出された遺構である。SX02の北東側に位置する(第313図)。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体が検出されている。埋葬主体は箱形木棺と考えられる。

**形状・規模** 墓壙は隅丸長方形をなすが、北辺はやや弧状をなしている。その規模は、主軸方向で1.75m、その直交方向で85cm～90cmを測る。検出面からの深さは10cmである。

棺は墓壙内のはば中央部に位置し、北側小口は礫が置かれていた。その規模は主軸方向で1.20mを測る。小口の規模は、北側で35cm、南側で34cmとほぼ同じである。このため、小口の規模から頭位を判断することは困難である。また棺検出面からの深さは7cmで、北側と南側でのレベルは同じである。

**出土遺物** 土器等の遺物は全く出土していない。

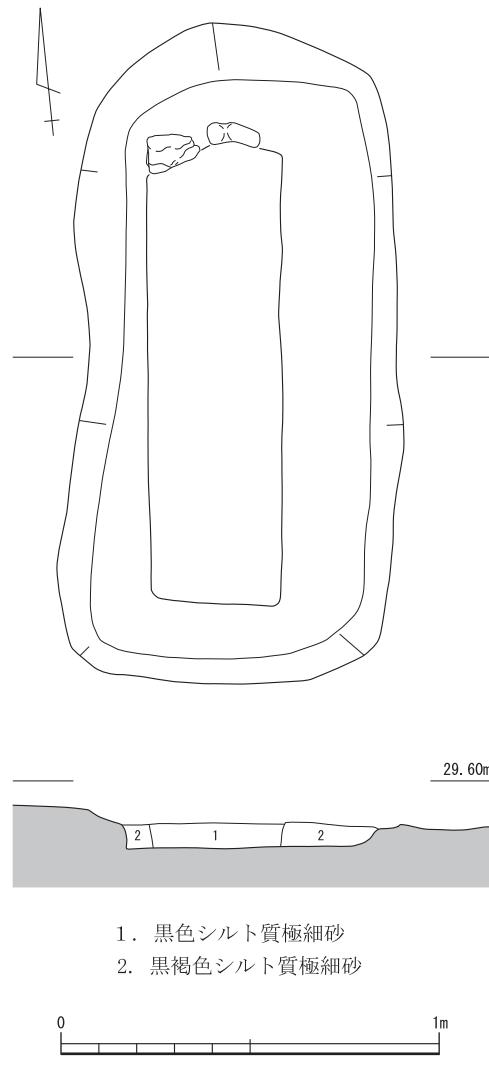
**時期** 出土遺物から時期を判断することは困難である。他の木棺墓の時期から、南構Ⅱ期に位置付けられる(第6章第2節)。

### 3. SX02(写真図版47)

**検出状況** 北地区北東部に位置する(第313図)。第4次調査で検出された遺構である。SX01の南西側、SX03の北東側に位置する。他の遺構との切り合い関係は認められず、全体が検出されている。埋葬主体は箱形木棺と考えられる。

**形状・規模** 墓壙は隅丸長方形をなすが、北辺と南辺はやや弧状をなしている(第315図)。その規模は、主軸方向で2.60m、その直交方向で95cmを測る。検出面からの深さは22cmである。棺は墓壙内のはば中央部で検出されている。ただし、中央部は明確に検出することができなかった。棺の周囲、特に南側を中心に礫が置かれていた。一部は棺材を固定するためのものと考えられる。

棺の規模は主軸方向で2.00mを測る。小口の規模は、北側で15cm、南側で22cmと、南側の方がやや広い傾向にある。ただし、北側小口については棺周囲の礫の影響も考えられることから、小口の規模から頭位を判断することは困難である。また棺検出面からの深さは20cmで、北側と南側でそのレベルは同じ

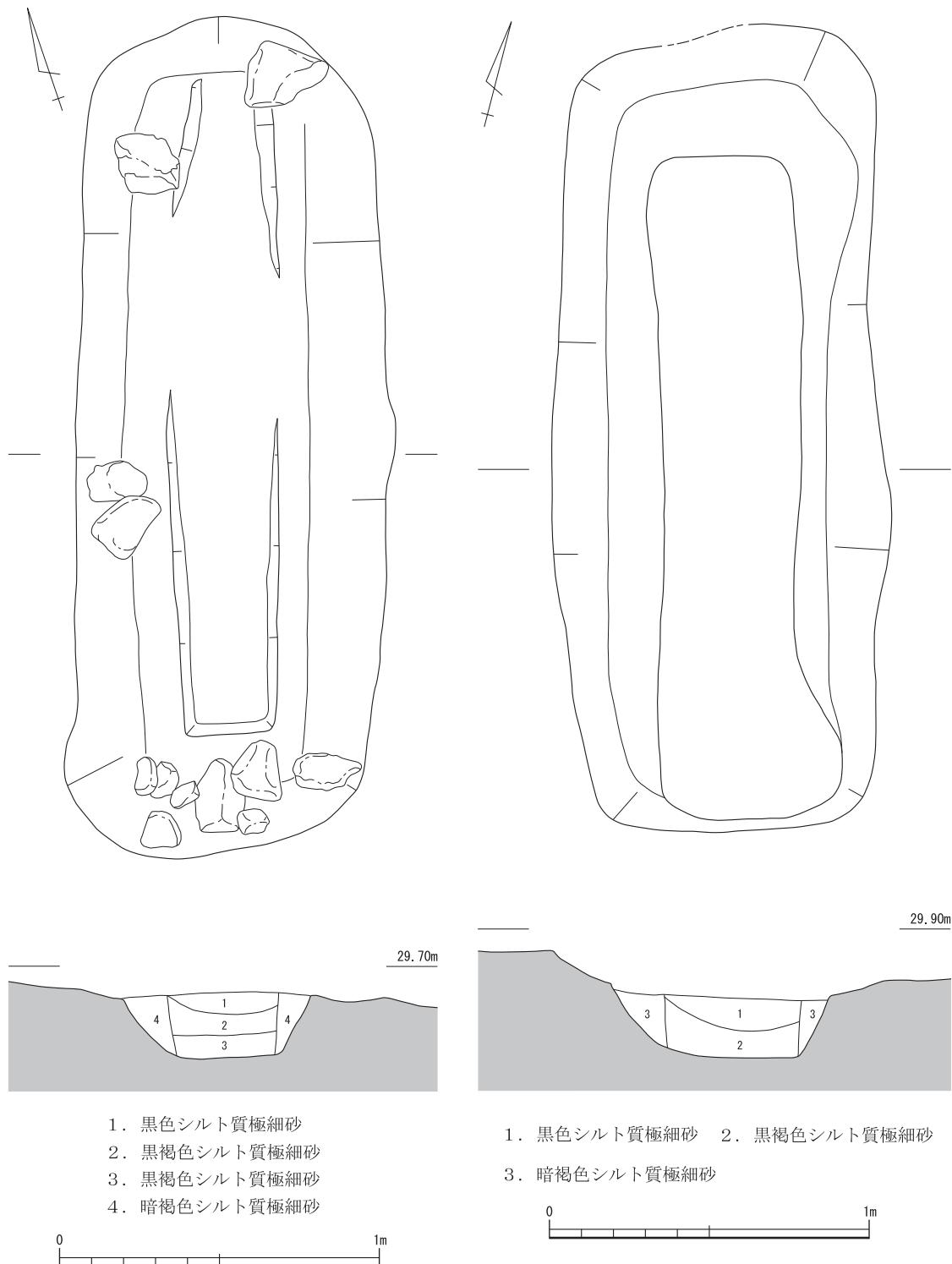


第314図 SX01

である。

**出土遺物** 当遺構内からは土器等の遺物は全く出土していない。

**時期** 出土遺物から時期を判断することは困難である。他の木棺墓の時期から、南構Ⅱ期に位置付けられる。



第315図 SX02

第316図 SX03

## 4. SX03(写真図版47)

**検出状況** 北地区中央部東側に位置する。第4次調査で検出した遺構である。SX02の南西側にあたる(第313図)。墓壙の北側の一部が遺構に切られている以外、全体が検出されている。

**形状・規模** 墓壙は隅丸長方形をなす(第316図)。その規模は、主軸方向で2.50m、その直交方向で1.05mを測る。検出面からの深さは33cmである。棺は箱形木棺と考えられ、墓壙内の南側に若干寄った位置で検出され、南側はその輪郭が不鮮明となっている。このため小口の規模から頭位を判断することは困難である。その規模は主軸方向で2.07mを測る。小口の規模は北側で40cmを測る。棺検出面からの深さは18cmで、北側と南側でそのレベルは同じである。

**出土遺物** 遺物は全く出土していない。

**時期** 遺物が出土していないため、他の木棺墓の時期から南構Ⅱ期に位置付けられる。

## 5. SX04(図版22 写真図版47)

附表46)

**検出状況** 北地区北東隅に位置する。

第9次調査で検出した遺構である。

SX01の北東側にあたる(第313図)。全体の約1/2が東側調査区外へ拡がっている。埋葬主体は箱形木棺と考えられる。

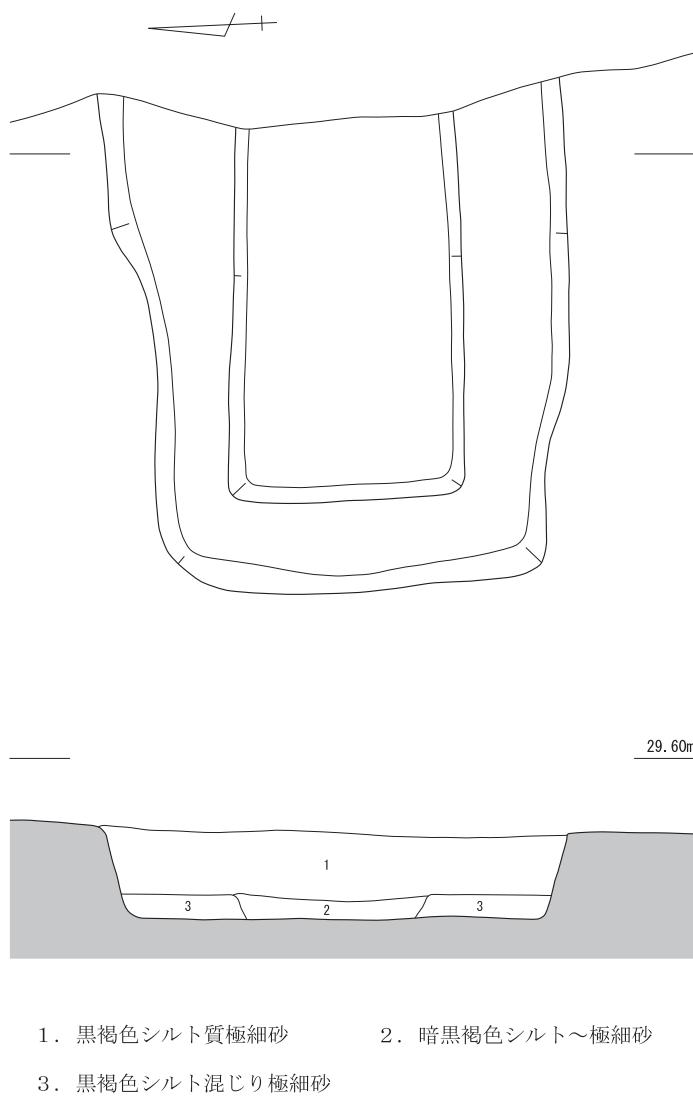
**形状・規模** 墓壙は隅丸長方形をなす。その規模は、主軸方向で1.30m残存し、その直交方向で1.20mを測る。墓壙内では棺を検出することができ、主軸方向で1.00m残存し、その直交方向で60cmを測る。棺検出面から棺底までの深さは6cmである。

なお、後述する出土土器について、棺内・棺外を含めた具体的な出土位置については不明である。

**出土遺物** 埋土内から高坏と壺が出土しているが、壺については小片のため図化できなかった。無形壺の口縁部片が出土している。高坏は608の1個体が出土している。体部に対して口縁部が外反気味に直立するものである。口径14.20cmと小型の高坏である。外面は横

方向のヘラミガキにより仕上げられているが、内面については摩滅のため観察できない。

**時期** 出土遺物から南構Ⅱ期に位置付けられる(第6章第2節)。



第317図 SX04



第318図 溝

## 第7節 溝

### 1. はじめに

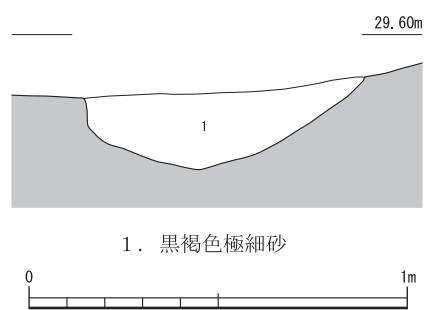
溝状遺構については、SD01とSD02の2本に限られる。いずれも北地区で検出されている(第318図)。

### 2. SD01(図版22 附表46)

**検出状況** 北地区北東隅に位置する(第318図)。第4次調査で検出された遺構である。北西-南東方向にのびる溝で、両端とも調査区内で収束している。わずかに弧状をなし、その長さは3.00mを測る。横断面は深い皿形をなし、最深部における検出面からの深さは20cmである(第319図)。埋土は黒褐色極細砂1層からなる。

**出土遺物** 埋土内から土師器の甕(605)が出土している。甕Ibに分類され、口縁部のみ残存する。外面はハケの後内外面とも横ナデにより仕上げられている。

**時期** 出土遺物から南構VII-1期に位置付けられる(第6章第2節)。



第319図 SD01横断面

### 3. SD02(図版22 写真図版86 附表46)

**検出状況** 北地区南東隅に位置する(第318図)。第9次調査で検出された遺構である。北西-南東方向にのびる溝で、北端は後世の攪乱により切られ、南側は調査区外までのびている。わずかに弧状をなし、検出した長さは1.25mを測る。横断面は逆台形をなし、幅は58cmを測る。最深部における検出面からの深さは24cmである。埋土は黒褐色極細砂1層からなる。

**出土遺物** 埋土内から土師器と須恵器が出土している。

**土師器** 皿と甕が出土している。皿は606の1個体が出土している。皿Aa1に分類され、底部から口縁部にかけて残存する。口径18.95cmと復元される大型の皿である。底部の残存がわずかであるため、高台の有無は判断できない。底部外面は横方向の静止ヘラ削り、他は内外面とも回転ナデにより仕上げられている。内外面には赤彩が認められる。

甕は図化できたのは607の1個体である。甕Acに分類される、口縁部片から体部にかけて残存する個体である。外面は、体部から口縁部にかけて縦方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。内面は、体部が横方向のヘラ削り、口縁部が斜方向のハケの後、口縁部が横ナデにより仕上げられている。

この他、図化できなかったが、甕の口縁部片と体部片が出土している。口縁部片は、わずかに残存する体部から丸胴タイプと考えられる。体部片は、外面がハケ、内面がヘラ削りにより仕上げられている。

**須恵器** 甕の口縁部片と体部片が出土しているが、いずれも小片のため図化できなかった。体部片は、外面が叩きにより整形され、内面には当て具痕が認められる。

**時期** 出土遺物から南構VII-2期に位置付けられる(第6章第2節)。



第320図 遺物出土地点